

3年B組

金八先生

第 5 回

放送日：1995年11月9日(木)

21：00～21：54

TBS

豊川「うちなんかは私立を五つか六つ受けなきゃ引つかからな
いだから、入試料だけだって大変なんだから」

トシ「うちだって同じよ、どうしてくれるのサ」

金八、説明・弁解の暇も与えられない。

給食が終って片付けている生徒たち。

久美子「大丈夫かな、金八さん、ねえアベちゃん」

阿部「腹減ったままじゃ誰だつてリキ出ないからなあ」

容子「へって来て美香に、第二陣の親は康とよし江の所だつて」

美文「変なの、よし江はスポチヤンやつてないじゃん」

よし江「いいじゃないのそんなこと！」

美香「よくないッ、また、私たち親に潰されるんだヨ！」

英美子「やっぱクビ？」

真穂「私はいや、折角話し合える担任に出会ったんだもの！」

享大「こいつが悪いんだこいつが（と修一にかかって行く）」

阿部「コラ、静かにしないか！」

騒ぎの中でドアがあき、金八が入ってくる。

東子「あ、先生、給食、ひっくりかえしちゃったけど、少し残してあるからネ」

金八「ああ、ありがと」

後のドアががらりと開いて乾、柳田、種田、トシ、豊川、高鳥の六人が入って来て後列横一列に並ぶ。

拓也「なんだ、なんだ」

ひろみ「これ、どういうこと？」

金八「静かに、臨時授業参観です」

信二「今は昼休みです、授業中じゃありません」

トシ「全く今の子は屁理屈ばかり」

金八「では訂正します。スポチヤンについて説明会をひらきます」

修一「……（身を縮める）」

金八「どうも君たちの説明ではきちんと御家庭に伝わっていな

いようだし保護者の方に御理解を得るためもう一度話します。現に昨日は三Bの専売特許だなんて、根性の狭い心得ちがもいたし」

智 樹 「だってサあ」

金 八 「話は終りまで聞いてから反論する(ビシリと)」

ト シ 「その通り！」

金 八 「それにです。幾らみんなで決めたからって、突然朝練はじめて狩り出されるのは先生迷惑です。君たちだって三年生なんだから受験の負担にならないよう、もう少しちゃんと話合って練習時間をきめなさい」

美 香 「ごめんなさい！ 先生」

金 八 「少し弁解めきますが、先生も三B^三に来てやっどひと月、高校訪問などたて混んでいたし、ようやく昨夜、スポチヤンに関する学級日記がまとめ上って、今日は各自に家へ持ち帰ってもらおうつもりでした」

と机の上に学級通信を前列の者に置く。

金 八 「先生はネ、進路決定を前にしたこの時期、君たちに思い

っ切り体の中からいろんな声をあげさせたいと思いました。地中にマグマがたまれば地震もおきるし噴火もします。勉強勉強といわれ続けて十五年だもの、たまりにたまってたモヤモヤが、押え切れなくなるとイジメみたいな形で出てくるような気がします。君たちの心がそんなふうになじれるよりは、一つのルールの中で思い切り暴れて発散してほしかった」

種 隆 「だからグッドタイミングだったと思います」

種 田 「けど、親にひと言の断わりもなしに」

ひろみ 「だから今先生が説明してるでしょ。私のいうことなんか半分も聞かないんだから」

種 田 「女の子が怪我でもしてみろ。今だってその程度なんだから嫁の貰いてがどこにいる」

ひろみ 「ひどーい！」

美 文 「男女差別発言反対！」

種 隆 「静かに！ 続けて下さい坂本先生(と時計を気にする)」

金 八 「誰にでもすぐ出来て、怪我は殆どありません。第一、型

がないから動きは全く自由です。審判はいるけれど、勝敗は自己申告制です。お父さんたちも折角来てくださったのだから、一度一覽になって頂きたいですが、独創性と言うか、すでに生徒たちは体力に合わせて私など思いつかないいろんな手を編み出しています。それと判断力、それが今の子どもに一番欠けているものですね」

ト シ 「だって、まだ子どもなんだから」

金 八 「もう子どもではありません。中学三年生です。人生のスタートライン立つ年頃です」

修 一 「(修造に)ミート」

修 造 「このガキ」

賢 治 「静かにしてください。先生の説明を聞かないのなら中座して頂きます」

修 造 「おおっ」

柳 田 「いや、ちゃんと聞かなきゃならないから、杉山さんも種田さんも発言は後にしてよ」

ト シ 「いいですよ副会長さんがそういうのなら」

金 八 「けど先生はこんなにみんながスポーツマン好きになるとは思わなかった」

由紀子 「だって面白いんだもの」

金 八 「どこがそんなに面白い？」

美 香 「いろんなことが出来るから」

金 八 「他には？」

朋 子 「強くなくても勝てるから」

金 八 「そうだね、けど、それは状況を捉える力が強い証拠なんだ、今、東京では、大田区と新宿区の中学がとり入れていて、先生は見学に行ってみくらしました。競技人口はまだまだ少いけれど、その中の日本チャンピオンが中学三年生だったんだよネ」

種 田 「ほんとかよ！」

金 八 「ええ。優勝候補の担任の先生が大会で見事にやられたと突っついていらっちゃった」

ト シ 「まさか！」

金 八 「もつと驚いたのは練習している中学生が美に敏捷だった

ことです。敏捷、分るかな？ キジキどとすばしっこ
とです。ポーッとしていたらやられちゃうものね。タラ
タラして今時の中学生ほど敏捷性とほど速いものは
いないと思っていただけれど、認識を改め手ほどきを受け
たということです」

伸也「そうだったのか？」

伸也の呟きに一斉に伸也を見る一同

金八「そうだったんだよ伸也、これを集中力というんだ。君た
ちの一番の苦手だよネ、五十分の授業もたないんだか
ら」

真一「先生エ」

金八「分っている。集中ばかりしてはいられないと言っただろ。
だからはじめにしなやかな体に柔軟な心と言っただけです。
先生が一番気に入ったのはウソがないということ、打た
れたら打たれたと自分でいうこと、負けず嫌いや見栄
っぱりには真気がいるでしょう。もしこのスポンジが真
剣だったらどうだろう。手首切られたり腹を突かれて、

まだまだなんていってられるかい？ 早く戦列からは
なれて手当てをしなければ、出血多量で死んでしまう。
だから、いかに相手を倒すかというより、想像力豊かに、
いかに身を守るかというスポーツなんです。これは護身
術なんだよ」

柳田「なるほど」

金八「自分にウソをつかないということは、自分の力を正直に
認めることで、そして、もう一つは枠にとらわれないこ
と、お相撲なら、足の裏以外、髷が地面についても負け、
土俵に指の先が出ても負けという厳しいきまりがある。
剣道と似ているけれど、防具をつけないから、それだけ
自由に動きまわることが出来る。すると必ず新しい世
界が開けてくる。まだ規模は小さいけど世界大会となれ
ば、ヨーロッパのフェンシング、中東のサトル、アフ
リカの槍とだつてこのスポンジ用具をつかって競技出来
るんだ。新宿の中学生はロス警察から来た身長一メー
ルのポリストと戦って一本とつた」

一同「えー」

金八「敏捷性と言っただろ、これには先生だって小銃だって敵わないヨ、つまり、身長差も男女差も年令差もない自由な戦法がOKなんだ。生きるか死ぬか、自分の命を賭ける時、こうでなければ一本と認めないという流儀のきまりはこの際はずす、流儀があるとすれば、すべて自分が基本になる。一本流の元祖、宮本武蔵がこういつている。命をかける兵法の道にあつて、これが昔からの先例であり、これが現代の法であるなどきまりを作ることはない、とね。言い方を変えろと、大学の法学部を出てラーメン屋になり、メンマを刻みながら客と哲学を語り合うもよし、なんとしても勉強がきらいならムリして苦しい高校受験などすることはない、けれど勉強はきらいの代りに好きなものがあるはずです。花作り、テレビゲーム、美容師さん、お絵描き、思ったものを何でもやっこらん」

トシ「先生！」

金八「本当に好きな道ならもっと前に進みたくなるのが人間だし生活もしていかなければならない。資格のいる仕事もあるだろうし、学びたければ改めて高校に入って勉強し直せばいいし、そういう制度も整いつつあります。だからどんなことにも逃げずにどんなに大かい相手にも向つていって欲しいです。自分のためなのだから自分を知つて独創的に受験勉強をすすめて欲しい。勉強につかれたらお母さんでも兄弟にでも相手になって貰つてスポーツマンで体をほぐしなさい。今は夢中でも飽きたら休めばよい、言ってみればこれは受験生向きのスポーツです。ストレスためるなと言つてもたまるもんです。だから思いっきり解放して、その真ん中に残つている芯権、それが自分なのだとしっかり掴んではなしたらいけないよ」

語りながら、ふと美香と目が合う。

涙をふくれあげさせている美香の目が鋭く気になる

金八。

柳田「先生！」

金 八「はい」

柳 田「なんだかよく分らず引っぱって来られたんだが、スポチャンとは、要するにチャンバラのことなんですよネ」

金 八「そうです。現代版チャンバラごっこです」

柳 田「だったら、何ら問題ないじゃないのかな」

ト シ「副会長さん！」

柳 田「だってさ、俺たちだってガキの頃、散々、あの河原でやっただじゃないか魚照さん」

種 田「そりゃまあ、そうだけど」

柳 田「子どもから小学校六年くらいまで、ガキ大将がいて泣き出した奴の面倒みてさ」

阿 部「ガキ大将ですか？」

柳 田「そうだよ。けど今の子は塾やらお稽古やらで混って遊ばないから気になってました。もっとも遊ぶといたって川原の他には場所もないしねえ。けど、やるか魚照さん、スポチャンというのを教わってサ。三十年ぶりのチャンバラ決着を」

金 八「それでは御理解いただけたと？」

柳 田「但し（と生徒たちを見て）勝手に塾を休むとか、受験勉強にさしつかえるほどやるのは反対だよ」

智 樹「分った、分った、大丈夫」

乾 「しかし、教育委員会の方では」

柳 田「沢田さんなら、私が説明に行っておきます。それでいいよネ、萬腹亭さんも」

ト シ「まあ、ネ」

生徒たちの大歓声。

一 同「やった——ッ」

抱き合いとびよる康と修一。

伸也はニコニコ。

乾が無然と柳田たちを案内して出て行く。

ル ミ「先生！」

金 八「腹へったよ——ッ」